



第40回

日本コミュニケーション障害学会 学術講演会

予稿集

- 会期 2014年5月10日(土)・11日(日)
- 会場 金沢大学 宝町キャンパス
- 会長 大井 学
金沢大学 子どものこころの発達研究センター
大阪大学大学院連合小児発達学研究所金沢校

第40回

日本コミュニケーション障害学会 学術講演会

予稿集

The 40th meeting of Japanese Association of Communication Disorders

会 期：2014年5月10日(土)・11日(日)

会 場：金沢大学 宝町キャンパス

会 長：大井 学

金沢大学 子どものこころの発達研究センター
大阪大学大学院 連合小児発達学研究所金沢校

主 催：日本コミュニケーション障害学会

後 援：石川県言語聴覚士協会
石川県教育委員会
金沢市教育委員会

第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 開催にあたって

第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会

会長 大井 学

生まれも育ちも金沢の人には、街についての独特の矜持があるようです。若い人はそれを嫌って東京に出たりするので、以前に比べればそれほどではなくなって来ているかもしれませんが、今なお強いブランド力がある地方都市といえます。

「エンジョモン(遠所者)」である私は、赴任当初、金沢ジモティーのこの誇りに気づかず、気を悪くさせる言動をした苦い思い出があります。が、赴任以来30年になろうとする今、多少は金沢文化に慣れ、その独特さの恩恵をいろいろな形で享受してきたので、セミ・ジモティーとして、この挨拶を書いています。

金沢の方言分布重心は数千軒の町家が残る旧市街地にあるそうで、これは京都と金沢だけのこと。伝統工芸はもちろん、衣食住の文化、産業で地元の独自性を発揮しようとする傾向は、学術にも影響しています。本学会を開催する基盤の一つ、2007年発足の金沢大学子どものこころの発達研究センターの性格にもそれは現れているようです。

このセンターは文理融合で創造性を発揮しようとするところに特徴があります。スタッフが10名あまりの小さな組織ですが、文理融合型自閉症研究に焦点化している点では国内に類例がないと思います。特筆すべき研究は国際的に注目されているオキシトシンをめぐるもの、ならびに脳磁計を用いた自閉症早期発見に関するものです。少数派の文系は、脳イメージングのタスク開発や、自閉症の心理社会学的研究、自閉症科学と市民のかかわりに関する社会技術開発などで貢献しています。

2つの教育講演の一つは現在実施中の自閉症オキシトシン臨床治験の結果というホットな話題に関するものです。もう一つは、自閉症と同様に早期発見早期治療をめぐる周到な考慮が必要な人工内耳についてです。特別講演には、文理融合で日本の先を行くイギリスから、自閉症と特異的言語発達障害の関連を遺伝子も含めて視野に入れるロンドン大学のC.F.Norbury氏を招待します。シンポジウムは特別支援教育に焦点を当てるものと、失語のある人々を含め言語臨床への会話分析の応用について焦点を当てるものを用意しています。

かつては加賀百万石の殿様が最短でも6泊7日かけた江戸金沢参勤交代のルートを、2015年にはようやく北陸新幹線が2時間半でつなぐこととなります。2014年は新幹線一本でこれられない不便をおかけしますが、ゆっくりとした旅の楽しみも味わっていただければ幸いです。皆様のご参加をお待ちしております。

第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会の 開催にあたり

日本コミュニケーション障害学会

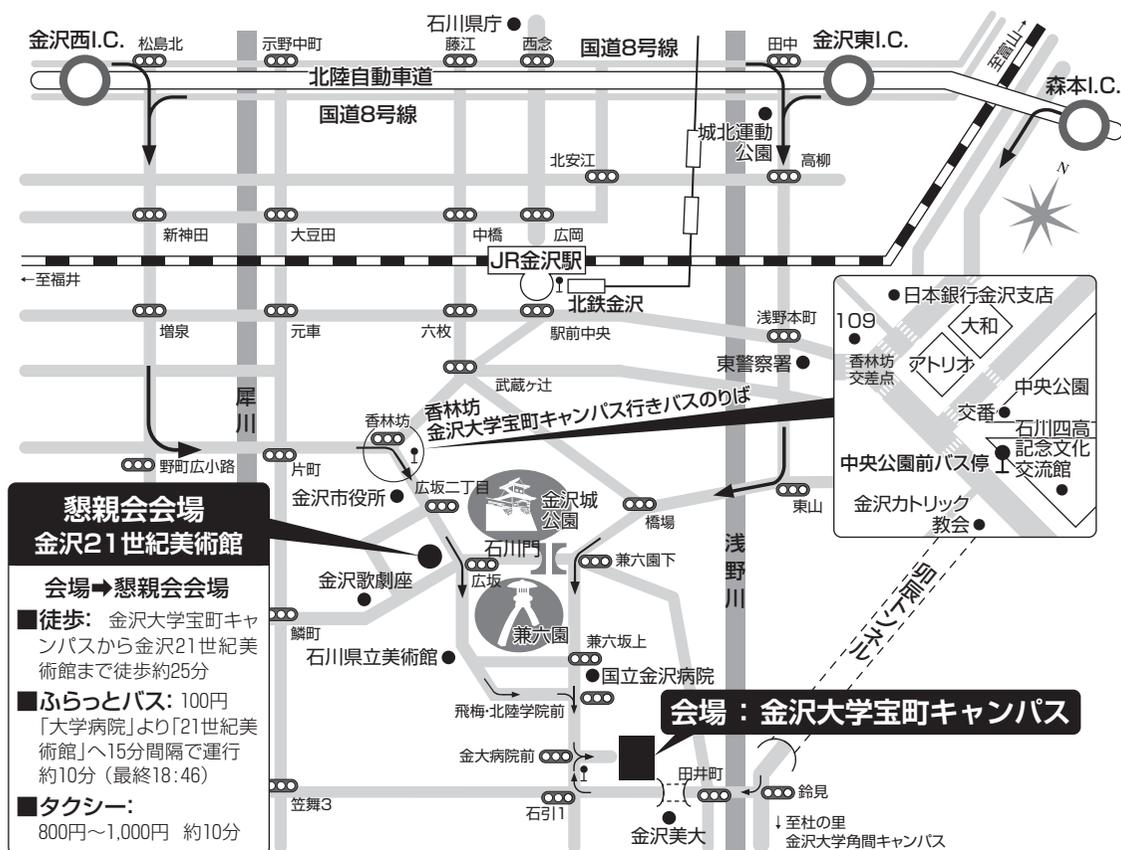
理事長 大伴 潔

日本コミュニケーション障害学会は、2014年に第40回という節目の学術講演会を開催する運びとなりました。かつては「日本聴能言語学会」という名称で活動を行ってきましたが、2003年の第29回学術講演会から現在の名称を冠しています。聴覚と音声言語の基礎的な研究や臨床にかかわるそれまでの対象領域を大切にしながらも、幅広い概念である「コミュニケーション」をその名称に掲げることで、医療・福祉・教育といった区分や職種にとらわれず、学際色豊かな活動を目指すという方向性が示されました。40年というのは、大学を卒業して職に就いた人が定年を迎える期間にもおおよそ相当しますから、この学会もその時々の課題に向き合ってキャリアアップを図り、ひとつの区切りを迎えたというところでしょうか。しかし、長いようでありながら、25万年以上前から存在したと言われる人類と切り離すことのできないコミュニケーションについて、その基本的なメカニズムや障害という観点から向き合い始めたのが本学会に限らず僅か数十年前ということですから、その意味ではまだきわめて新しい学問領域であるとも言えます。今後も諸先輩方の臨床・研究活動の上に、私たちは日々新しい知見を積み重ねていくことが課せられています。

この第40回大会を金沢で開催することとなりました。金沢は文化を継承し伝統を重んじる都市ですが、一方で現代アートの発信地でもあります。歴史と先進性が混じり合うこの地は、知見や経験の蓄積と先進的な取り組みが融合して成り立つ学会の講演会開催地としてふさわしいと言えます。今年度用意されたプログラムからも、先進的な研究の一端が伺えます。金沢大学での研究プロジェクトを反映した自閉症へのオキシトシンの効果に関する講演や、自閉症スペクトラム障害と特異的言語発達障害の重なり、人工内耳装用児の言語発達と指導についての講演など、多様な関心をもつ参加者の期待に沿う内容が用意されています。日々の実践の礎を確認する機会であるとともに、明日からの展開に向けた刺激を与えてくれるでしょう。

2014年度の学術講演会の準備を進めてくださった会長の大井学先生、事務局の田中早苗先生、小林宏明先生をはじめとする多くの皆様に心より御礼申し上げます。今回初めて本州日本海側での開催となり、これまで学術講演会に地理的に参加しにくかったこの地域の方々にとって研鑽と議論の場を提供していただきました。この金沢大会が参加者の心に長く残ることを祈念しています。

交通案内



会場へのアクセス

市内路線 <金沢駅からバスで金沢大学宝町キャンパスへ>

■北鉄バス東口③番乗場(橋場町経由)

⑩⑪「金沢学院大学」「東部車庫」 ⑫「湯涌温泉」行き乗車小立野下車

<香林坊からバスで金沢大学宝町キャンパスへ>

⑩「東部車庫」 ⑬「辰巳丘高校」行き乗車小立野下車

※バスの便が少ないので、北鉄バス(北陸鉄道株式会社)のホームページ <http://www.hokutetsu.co.jp/> をご確認ください。

タクシー <金沢駅からタクシーで金沢大学宝町キャンパスへ> 所要時間 約15~20分 1,200円~1,500円位

■自家用車 ■北陸自動車道金沢西インターから(金沢西インターから約25分)

インターを降りて金沢市「松島北」交差点を金沢市街・兼六園方面へ右折し、しばらく進む。「野町広小路」交差点を香林坊方面へ左折し、「香林坊」交差点を右折。「広坂」交差点を直進。「飛梅・北陸学院前」交差点を右折し、「金大病院前」交差点を左折。

■津幡バイパスまたは北陸自動車道金沢森本インターから(金沢森本インターから約20分)

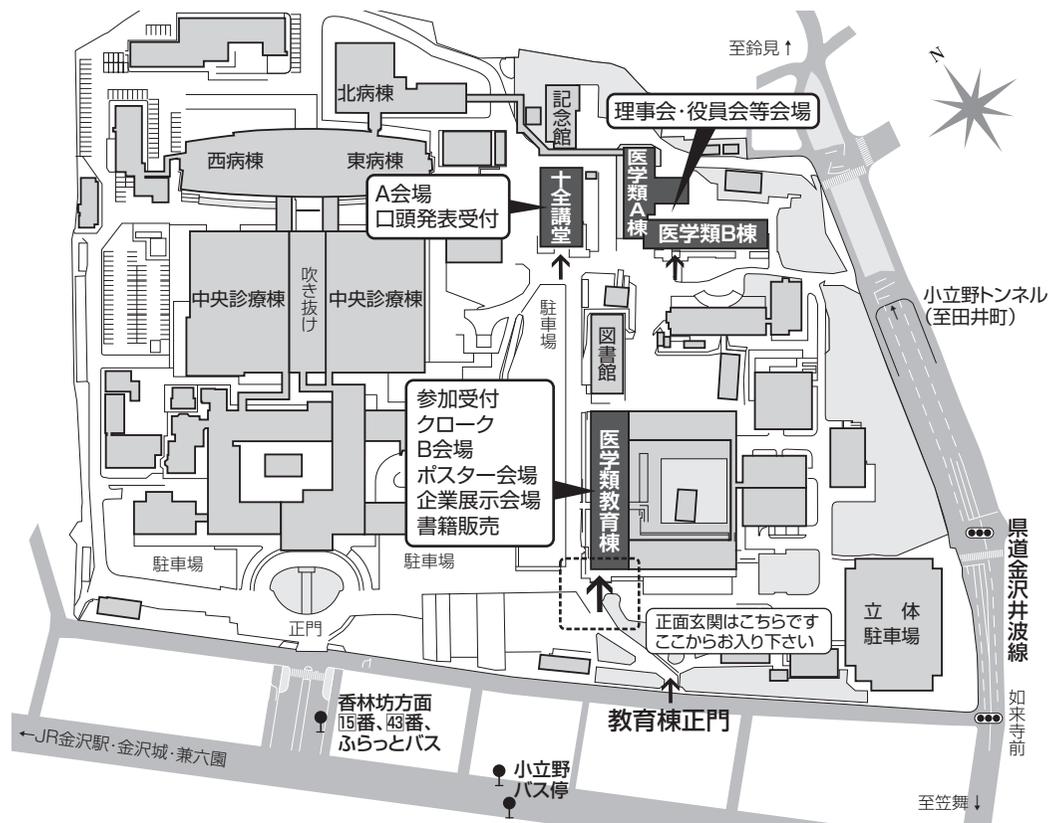
津幡バイパスからは金沢市街・兼六園・山側環状方面へ進む。森本インターからは七尾・金沢市街方面へ進み、小松・白山・金沢市街・兼六園・山側環状へ進む。卯辰トンネルを抜け、最初の信号「鈴見」交差点を金沢市街・兼六園方面へ右折し、「田井町」交差点を小立野へ直進。「石引1丁目」交差点を右折し、「金大病院前」交差点を右折。

■北陸自動車道金沢東インターから(田中交差点から約25分)

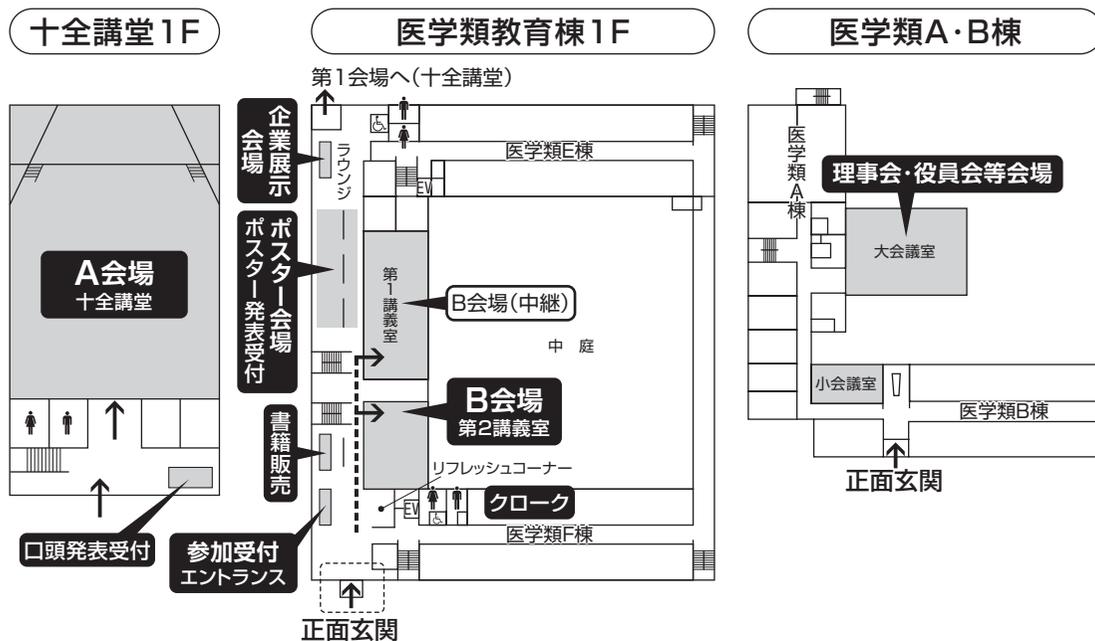
インターを降りて「田中高架橋」下の「田中」交差点を左折し、しばらく進む。「東山」交差点を右折し、「橋場」交差点、「兼六園下」交差点を直進。「兼六坂上」交差点を左折し、「金大病院前」交差点を左折。

会場案内

金沢大学宝町キャンパス案内



会場案内図



ご 案 内

■ 受 付

1. 受付は5月10日、11日両日とも、8時15分より行います。

2. 「参加受付」は、医学類教育棟一階に設けてあります。

3. 参加費および懇親会費は次の通りです。

会 員	8,000円
非 会 員	2日参加 8,000円(+予稿集代1,000円)
	1日参加 4,000円(+予稿集代1,000円)
学 生	4,000円(+予稿集代1,000円) ※学生証を提示してください。
懇親会費	5,000円

4. 予稿集は、受付にて1冊1,000円で販売いたします。

■ 進 行

【口頭発表】

1. 座長の先生へ

- (1) 担当日に総合受付で「座長受付」をお済ませください。
- (2) 開始予定の10分前には、次座長席にお着きください。
- (3) 1演題の発表は7分、質疑応答は3分です。
- (4) 質疑応答では、発言者の所属・氏名を確認してください。

2. 演者の方へ

(1) 口頭発表受付について

十全講堂ロビーで「口頭発表受付」を発表群開始30分前までにお済ませください。朝一番の群で発表される方は、準備時間の都合上、「口頭発表受付」を先に済ませてから「参加受付」を行ってください。

2日目に発表の方も1日目に受付可能です。

(2) 発表用データについて

① 口頭発表は会場設置のPC (Windowsのみ) を使用していただきます。

② 用意しているコンピュータのOSとアプリケーションは以下の通りです。

OS: Windows7

プレゼンテーションソフト: Microsoft PowerPoint

※ PowerPointは、Microsoft PowerPoint2000以降のバージョンで作成されたプレゼンテーションを表示できるソフトです。

事前に御自身のPCにて必ず動作チェックを行って下さい。

③ 演者の方は発表データをCD-RもしくはUSBメモリーでお持ちください。USBメモリーは、必ず事前にウイルスチェックを済ませてご持参ください。

※ CD-RW、MO、その他のメディアは受け付けられません。ご注意下さい。

④ 動画・音声等を使用される場合は、Microsoft社Media playerで再生可能であることをご確認ください。念のため、ご自身のPCをバックアップとして持参されることをお勧めします。PowerPointに動画ファイルをリンクする場合は、必ずパワーポイントのファイルと動画のファイルを1つのフォルダ内に保存した上でデータを作成してく

3. 学会場では簡単なお茶・コーヒーなどを用意しております。
また、11日(日)は、金沢大学茶道部による野点が催されます。

3. 懇親会

10日(土)19時～21時に、金沢21世紀美術館の『Fusion21』(金沢市広阪)で懇親会を行います。会費は5,000円です。学会員同士が親睦を深める良い機会ですので、多数の方の参加をお待ちしております。人数把握のため、なるべく事前申し込みをお願いいたします。氏名・所属・連絡先をそえ、「懇親会申込」の件名で事務局(taikai40@ed.kanazawa-u.ac.jp)までお申し込みください。

会費は当日、「参加受付」にてお支払い下さい。

4. 託児室

託児室を設置いたします。事前予約が必要です。託児をご希望の方は、ホームページをご覧ください。託児室御利用の方は、当日お子さんを連れて、「参加受付」までお越しください。

5. 役員会、委員会

常任理事会	5月9日(金)	17:30～20:30	金沢駅周辺
役員会	5月10日(土)	12:10～13:10	医学類 A 棟大会議室
学術事業部会議	5月11日(日)	12:10～13:10	医学類 B 棟小会議室
編集委員会	5月11日(日)	12:10～13:10	医学類 A 棟大会議室

6. 総会

日本コミュニケーション障害学会総会が開催されます。是非、ご出席ください。

日時：5月11日(日) 13:15～14:14

会場：A 会場(十全講堂 大ホール)

7. その他

1. クロークは、教育棟1階にあります。
2. 学会本部に御用の方は、総合受付にお出下さい。
3. 車椅子ご利用の方は、事前に事務局(taikai40@ed.kanazawa-u.ac.jp)にご連絡ください。

■分科会

本学会では、会員の自主的な研鑽を目的として、分科会、委員会、研究助成金の付与などの活動を推進しています。今学会では、9日(金)14:00～17:00、及び10日(土)17:00～18:20に以下の分科会を開催します。多くの皆様の参加をお待ちしています。

9日(金)14:00～17:00

会話分析研究分科会 医学類 A 棟大会議室

10日(土)17:00～18:20

① 言語発達障害研究分科会 教育棟第2講義室(B会場)

② 吃音および流暢性障害研究分科会 教育棟第1講義室

③ 重度失語症臨床分科会 医学類 A 棟大会議室

④ 自閉症のある子と楽しめるコミュニケーションゲーム開発分科会
十全講堂2階大会議室

日 程 表

第1日目 5月10日(土)

	A 会場 十全講堂大ホール	B 会場 教育棟第2講義室(遠隔:第1講)	教育棟 第1講義室	A棟 大会議室	十全講堂2F 大会議室	教育棟1F ラウンジ	
8:15	8:15~ 受付開始					8:15 ~ 11:00	
9:00	8:50~9:00 開会の挨拶 9:00~9:50 A群 吃音・構音障害 (5)	9:00~9:40 C群 聴覚・人工内耳 (4)				ポスター受付展示	
10:00	10:00~11:00 教育講演 1 棟居 俊夫氏 司会: 大井 学	自閉症のオキシトシンによる臨床試験の難しさ ~その背景にある3つのこと~					
11:00	11:10~12:10 B群 学習障害・自閉症 (6)	11:10~12:10 D群 医療と教育の連携 (3) E群 高次脳機能障害 (3)				ポスター展示	
12:00	12:10~13:30 屋 休 み				12:10~12:40 ポスター質疑① (奇数)		
13:00	13:30~14:30 教育講演 2 城間 将江氏 司会: 武居 渡	人工内耳装用児の言語発達と指導				11:00 ~ 18:30 ポ ス タ ー 展 示	
14:00	14:45~16:45 シンポジウム 1 特別支援教育における言語・コミュニケーション障害がある子どもの教育の今 青山 新吾氏 堀川 淳子氏 吉田 麻衣氏 松本 美代子氏 司会: 小林 宏明						
15:00							
16:00							
17:00		17:00~18:20 言語発達障害 研究分科会	17:00 ~18:20 吃音および 流暢性障害 研究分科会	17:00 ~18:20 臨床分科会 重度失語症	17:00 ~18:20 自閉症の子と楽しむ コミュニケーション ゲーム開発分科会		
18:00							
19:00	19:00~ 懇 親 会 (会場: 金沢21世紀美術館 Fusion 21)						
20:00							
21:00							

第2日目 5月11日

	A 会場 十全講堂大ホール	B 会場 教育棟第2講義室(遠隔:第1講)	教育棟 第1講義室	A棟 大会議室	十全講堂2F 大会議室	教育棟1F ラウンジ
8:30						
9:00	8:45~10:15 F群 小児検査・評価法 I (5) G群 小児検査・評価法 II (4)	8:45~9:55 H群 失語症 (5) I群 AAC (2)				8:45 ~ 15:00 ポスター展示
10:00						9:00 ~ 16:20 企業展示
11:00	10:30~12:10 特別講演 Overlap between autism spectrum disorders and more specific language disorder: diagnostic challenges Dr. Courtenay Frazier Norbury 司会: 大伴 潔 通訳: 田中 裕美子 金沢大学子どもこころの発達研究センター 共催					
12:00	12:10~13:15 昼 休 み				12:10~12:40 ポスター質疑② (偶数)	
13:00						ポスター展示
14:00	13:15~14:15 総 会					
15:00	14:20~16:20 シンポジウム 2 成人のコミュニケーション障害における会話分析の応用可能性をめぐって 佐藤 ひとみ氏 吉田 敬氏 志村 榮二氏 小池 高史氏 秋谷 直矩氏 司会: 吉野 真理子 佐藤 ひとみ					15:00~ 16:00 ポスター撤去
16:00	16:25~ 閉会の挨拶					
17:00						

プログラム

特別講演 5月11日(日) 10:30～12:10

A会場(十全講堂大ホール)

一般公開「金沢大学子どものこころの発達研究センター 共催」

司会：大伴 潔(東京学芸大学)

通訳：田中 裕美子(大阪芸術大学)

Overlap between autism spectrum disorders and more specific language disorder: diagnostic challenges

Dr. Courtenay Frazier Norbury Department of Psychology,
Royal Holloway, University of London

教育講演 1 5月10日(土) 10:00～11:00

A会場(十全講堂大ホール)

司会：大井 学(金沢大学)

自閉症のオキシトシンによる臨床試験の難しさ ～その背景にある3つのこと～

棟居 俊夫 金沢大学子どものこころの発達研究センター

教育講演 2 5月10日(土) 13:30～14:30

A会場(十全講堂大ホール)

司会：武居 渡(金沢大学)

人工内耳装用児の言語発達と指導

城間 将江 国際医療福祉大学保健医療学部 言語聴覚学科

特別支援教育における
言語・コミュニケーション障害がある子どもの教育の今

S1-1 通じ合っている実感を追いかけて

ノートルダム清心女子大学 青山 新吾

S1-2 特別支援学校の地域支援の立場から、子ども・保護者・担任を支援する

広島市立広島特別支援学校 地域支援部 堀川 淳子

S1-3 子どもへのねがい ～「人」を育てる

横浜市立八景小学校 きこえとことばの教室 吉田 麻衣

S1-4 特別支援教育への言語聴覚士の関与の現状と課題

Saya-Saya ことばの教室 松本美代子

成人のコミュニケーション障害における
会話分析の応用可能性をめぐって

S2-1 会話分析の臨床的有用性

浴風会病院 佐藤ひとみ

S2-2 会話分析の失語臨床への応用の可能性

愛知淑徳大学 健康医療科学部 吉田 敬

S2-3 Dysarthria 例への会話分析の応用と今後の展望

愛知淑徳大学 志村 栄二

S2-4 認知症患者への話しかけ場面の会話分析

日本大学 小池 高史

S2-5 会話分析の難聴への応用

京都大学 秋谷 直矩

一般演題(口頭発表)

第1日目 5月10日(土)

A群 吃音・構音障害 9:00～9:50

A会場(十全講堂大ホール)

座長：原 由紀(北里大学)

峪 道代(大阪府立母子保健総合医療センター)

A-1 吃音のある成人の評価法の開発 —質問紙試案の作成—

国立障害者リハビリテーションセンター研究所 酒井奈緒美

A-2 吃音の進展した小学校中学年児に対する指導
—コミュニケーション態度の変容

福岡教育大学特別支援教育講座 見上 昌陸

A-3 非流暢性の引き金の序列について：日英語対照

豊橋技術科学大学 総合教育院 氏平 明

A-4 12年間関わり続けることができた吃音の一事例
～小学校入学直前から就職まで～

近畿大学医学部附属病院 リハビリテーション部 久保田 功

A-5 第一第二總弓症候群児の鼻咽腔閉鎖機能と構音について

独立行政法人 国立成育医療研究センター リハビリテーション科 柳澤 瞳

B群 学習障害・自閉症 11:10～12:10

A会場(十全講堂大ホール)

座長：原 恵子(上智大学)

権藤 桂子(共立女子大学)

B-1 読み困難児の単語音読検査結果

上智大学言語聴覚研究センター 原 恵子

B-2 家族性発達性ディスレクシアの可能性がある
—卵性双生児及び父親の障害像と認知特性の検討

東京大学 先端科学技術研究センター 河野 俊寛

B-3 自己紹介・共感ゲーム —自閉症の子とゲームでコミュニケーション4—

兵庫県立西はりま特別支援学校 山本 正志

B-4 PECSのフェイズⅢ通過と発達の関係性について

平谷こども発達クリニック 山口 大輔

P群 吃音

P-1 家庭で言語指導を行う保護者の吃音に対する態度の変化

北海道大学大学院文学研究科 藤井哲之進

P-2 母子通園施設における軽度吃音児への ST 指導経過
—幼児期から学童期にかけてのかかわり

東神楽町・東川町子ども発達支援センター おひさま 熊田 広樹

Q群 聴覚

Q-1 愛知県西部地域における新生児聴覚スクリーニング検査の現状と問題点

愛知淑徳大学 医療福祉研究科 榊田 未紘

Q-2 指文字、文字を介して音声言語を獲得した難聴重複障害児の一事例

北里大学 医療衛生学部 水戸 陽子

Q-3 SISI (Short Increment Sensitivity Index) 検査における
周波数と個人差について

関西総合リハビリテーション専門学校言語聴覚学科 堀田 修

特別講演

一般公開

金沢大学子ども心の発達研究センター 共催

Overlap between autism spectrum disorders and more specific language disorder: diagnostic challenges

Dr. Courtenay Frazier Norbury

Department of Psychology,
Royal Holloway, University of London

司会：大伴 潔氏 (東京学芸大学)

通訳：田中 裕美子氏 (大阪芸術大学)

5月11日(日) 10:30～12:10

A会場(十全講堂大ホール)

Courtenay Frazier Norbury (コートニー フレイザー ノーベリ)氏

経 歴

1992年ニューメキシコ大学卒業、1996年シティ大学ロンドンにて修士号取得(臨床コミュニケーション学)。言語聴覚士として臨床経験を経たのち、オックスフォード大学にてドロシー・ビショップ氏に師事し、2004年にPhDを取得(実験心理学)。その後、同大学リサーチフェロー等を経て、現在はロンドン大学ロイヤルホロウェイ心理学部にて教授を務める。

言語、読み書き、コミュニケーションの発達を専門とするが、現在は自閉症などの発達障害における言語障害の併存や診断、評価の問題に取り組んでいる。心理学実験から人口調査まで、幅広いアプローチを採用し研究を実施している。

2008年に出版された著書『Understanding Developmental Language Disorders: From Theory to Practice』(Psychology Press)は、2011年に日本語版が出版された(『ここまでわかった言語発達障害 - 理論から実践まで』田中裕美子(監訳)、医歯薬出版)。

代表著書:

Norbury, CF. & Paul, R. (in press). Speech, Language and Social Communication Disorders. In Rutter, M. et al. (Eds) *Rutter's Child and Adolescent Psychiatry, 6th Edition*, Oxford: Blackwells.

Norbury, CF. (2013). Autism spectrum disorders. In L. Cummings (Ed.) *Handbook of Communication Disorders*. Cambridge University Press.

Norbury, CF (2011) Developmental Language Disorders: An Introduction. In Howlin, P., Charman, T., Ghazziuddin, M. (Eds) *Sage Handbook of Developmental Disorders*. London: Sage.

Norbury, CF, Tomblin, JB, Bishop, DVM (Eds) (2008): *Understanding Developmental Language Disorders*, Hove: Psychology Press.

最新論文:

Norbury, CF. (2014). Social (Pragmatic) Communication Disorder-conceptualization, evidence and clinical implications. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 55(3), 204-216.

Norbury, CF, Gemmel, T. & Paul, R. (2013). Pragmatic Abilities in Narrative Production: A Cross-Disorder Comparison. *Journal of Child Language*, 30, 1-26.

Norbury, CF and Sparks, A. (2013) Differences or Cultural Issues in Understanding Developmental Language Disorders. *Developmental Psychology*, 49(1), 45-58.

Overlap between autism spectrum disorders and more specific language disorder : diagnostic challenges

Courtenay Frazier Norbury

Department of Psychology,
Royal Holloway, University of London

Children with autism spectrum disorders are characterised by two core developmental deficits : deficits in social interaction and social communication, and a restricted repertoire of interests and behaviours. Together, these difficulties should present enormous challenges for children to learn their native language, yet some children acquire extensive vocabularies and grammar, and can converse with others in quite complicated ways. My research investigates how children with autism spectrum disorders learn language and specifically, why some children with autism also experience language impairment. I consider whether these children have a co-occurring disorder, 'specific' language impairment, and what the similarities and differences are in the developmental profile of children with language disorders across diagnostic boundaries.

自閉症スペクトラム障害と特異的言語障害の併存 ～診断における課題～

コートニー フレイザー ノーベリー博士

ロンドン大学 ロイヤルホロウェイ

自閉症スペクトラム障害の子どもは二つの発達の障害により特徴づけられる。ひとつは社会的相互作用やコミュニケーションが阻害されていること、もうひとつは興味や行動の範囲が限局的であることによる。これらの問題が合わさり子どもたちの母語学習に大きな困難を引き起こすが、一方で豊富な語彙や文法を獲得し、極めて複雑な方法で他者と会話を交わすことができる子どももいる。そこで、いかにして自閉症スペクトラム障害の子どもたちは言語を学習するのか、具体的には、なぜ自閉症の子どもたちの中には言語障害を伴うこともあるのか、という問題が持ち上がる。本講演では、これらの子どもたちには「特異的」言語障害が併存しているのかどうか、また、言語障害が見られるが診断の異なる子どもたちの発達のプロフィールには、どのような相違点があるのかを論じていく。

J-1

在宅復帰後にみえてきた問題への アプローチを行った生活期失語症者の一例

鬼頭 照奈、石川 陽介

特定医療法人 有隣会 東大阪病院

【はじめに】失語症者の発話能力は環境に左右され、会話の困難さから生活範囲が限定されやすい。今回、在宅復帰後それらの問題が生じた当事者・家族に、失語症の理解を高め、生活範囲拡大にむけた環境調整を実施した。

【症例】A様79歳女性。左MCA領域脳梗塞。当院回復期病棟を156病日目に退院し妹様と2人暮らし。以後、訪問リハビリ継続。運動性失語症認めるも、家庭内の会話は概ね理解可能。短文表出可能だが喚語困難・保続等不十分な発話で聴き手の推測が必要。

【経過】現状把握の為アンケートを実施。5段階評価で「相手の言いたい事が理解できるか」を会話の内容別に問うとA様平均2.7・妹様平均3.3、「会話が楽しいか」には双方が3と回答。失語症の知識不足により会話時の工夫が行えず、両者間の会話は必要最低限となり、また生活範囲は家の中に限定されていることが分かった。そこで2つの環境調整を行った。1つ目は会話の工夫の提案で、妹様にDiscommunicationが生じる会話場면을説明し、文字の併用、確認作業を随時行う等の工夫を伝達した。A様には喚語困難時の対処法等、諦めず伝える事を提案した。2つ目に生活範囲拡大の為、買い物場面に同行し、会話内容等を評価した。結果、会話を諦めがちで買うべき物に辿りつけなかった為今後は外出前に目的や予定を確認する事を提案した。

【結果】介入時と同様のアンケートを実施。「相手の言いたいことが理解できる」を双方が5と、「会話が楽しい」をA様は4、妹様は5と回答。会話の頻度や内容、生活範囲や外出頻度も拡大したと回答した。

【考察】今回、失語症の知識を高め相手の話が理解できる機会が増えたことで、会話内容・頻度・満足度の向上、外出頻度や範囲拡大へと繋がった。失語症者が在宅で最大限の能力を発揮する為、言語機能訓練と共に周りが失語症への理解を深める介入が必要である。

J-2

言語聴覚士によるストレングスモデルを用いた友の会活動への支援の効果

渡邊 真帆¹⁾、加藤 愛香²⁾、宮澤 ちづる³⁾、
近藤 峻⁴⁾、山田 萌⁵⁾、廣實 真弓⁶⁾

1)医療法人社団永生会 永生病院、2)メビウスのWA
3)みどり野リハビリテーション病院
4)小平中央リハビリテーション病院
5)石和温泉病院、6)帝京平成大学

【はじめに】ストレングスモデルでは当事者の「弱み」や「できないこと」ではなく、「強み」や「できること」に着目して、当事者の地域生活とリカバリーの達成を支援しようとする(坂田、2013)。ストレングスモデルが高次脳機能障害者のデイケアや地域支援に有効だとの報告はあるが、ストレングスモデルを友の会活動に活用した報告はない。今回我々はストレングスモデルを高次脳機能障害友の会活動への支援に活用したので報告する。

【対象】友の会には当事者11人、家族9人、ボランティア8人(一般人3人、学生2人、ST6人)が参加した。介入前後の面接は、面接の同意が得られた当事者10人とその家族9人を対象とした。スーパーバイザー(SV)のST1人と当事者1人以外は、ストレングスモデル未経験者だった。

【方法】ストレングスモデルを活用し、ストレングスモデルを活用し8か月間(9回)支援した。STと学生ボランティアは勉強会、活動後の振り返り、メールでの振り返りを通してSVからアドバイスを受けながら活動した。当事者と家族は活動、勉強会、振り返りを通してストレングスモデルを学習、体験した。介入前後にアンケートを実施し各当事者の定例会への参加状況、快適さ等について聴取した。

【経過・考察】

参加状況：介入前は当事者には無理だからと家族が定例会の内容を決定していた。介入後は当事者が希望した場合には定例会の内容・企画を話し合い、個々人の希望を尊重しながら参加するようになってきた。

ストレングスの自覚：成功体験を主観的、客観的に振り返ることで、当事者からは発症後(受傷後)初めて喜びを実感できた、褒められて嬉しい等、また家族からは当事者が前年より生き生きしていた等の感想が挙げられた。一方ストレングスモデルの効果は体験できたが、自分たちだけで活用するには8か月の支援では短いのではないかと意見が出された。

Q-1

愛知県西部地域における 新生児聴覚スクリーニング検査の 現状と問題点

榊田 未紘¹⁾²⁾、井脇 貴子¹⁾

1) 愛知淑徳大学 医療福祉研究科

2) 愛知医科大学病院 耳鼻咽喉科

【はじめに】両側聴覚障害の発生頻度は0.05%とされている。聴覚障害児を早期に発見し療育することは言語獲得に極めて重要である。

【目的】新生児聴覚スクリーニング検査(Newborn Hearing Screening : NHS)が普及するにつれて偽陰性例や偽陽性例が多いという問題が浮上してきた。今回 NHS を正確に行うにはどのようなシステム作りや施設間の連携が必要かについて検討することを目的とした。

【方法】

1. 愛知医科大学病院で精査を受けた児の検討

2007年1月から2012年12月までに NHS で refer となり ABR を受ける目的で愛知医科大学病院耳鼻咽喉科を受診した0歳児89名を対象とした。

2. 愛知県西部地域の耳鼻咽喉科・産科へのアンケート調査

愛知県西部地域の耳鼻咽喉科に精密検査に関するアンケート調査を、そして同産科に NHS に関するアンケート調査を2013年7月に郵送にて行った。

【結果】

1. 愛知医科大学病院で精査を受けた児の検討

NHS と ABR の結果に整合性がみられたケースは64.0%であった。偽陰性例は10.7%、偽陽性例は25.2%であった。

2. 愛知県西部地域における耳鼻咽喉科・産科へのアンケート調査

耳鼻咽喉科からのアンケート回収率は19.6%、産科からのアンケート回収率は40.7%であった。全てのアンケート項目において施設ごとに違いがみられた。

【考察】アンケート調査では施設ごとに違いがみられた。これは NHS が行政から外れ各施設独自に実施するようになったためと考えられる。愛知医科大学病院の精査の結果より愛知県西部地域の NHS と精査の整合性は全国平均より低いことがわかった。これらより NHS の主体である産科の意識の向上が重要ではないかと考えられた。そのために情報交換会等が効果的であると思われた。また、refer 児の経過観察や保護者指導を行うことが後天性難聴の発見につながるのではないかと考えられた。

Q-2

指文字、文字を介して音声言語を 獲得した難聴重複障害児の一事例

水戸 陽子¹⁾、石坂 郁代¹⁾、鈴木 恵子¹⁾、
秦 若菜¹⁾、梅原 幸恵²⁾

1) 北里大学 医療衛生学部、2) 北里大学病院 耳鼻咽喉科

【はじめに】難聴児の言語獲得の経過は様々である。本研究では、指文字、文字を介して言語発達が促され、音声言語を獲得した難聴重複障害児一事例の経過を報告する。

【症例】ろう学校幼稚部と児童発達支援センター在籍の年長児。診断名は、臍帯ヘルニア、精神運動発達遅滞、重度難聴。前院にて ABR で両耳とも約80dB、CA0 : 7より補聴器両耳装用開始。CA2 : 1時摂食訓練、歩行訓練を目的に A センター来所。全体発達は、CA3 : 2時の新版 K 式2001にて全領域 DQ44、姿勢運動 DQ34、認知適応 DQ48、言語社会 DQ35。

【ST 初診時評価 CA3 : 7】COR で平均85dB、補聴器装用時50dBで、この頃より補聴器常時装用可能。事物の機能的操作は可能だが、身振りや手話、音声による言語は未獲得。幾何図形の弁別可能など言語理解に比し視覚的認知が良好。人への関心が薄く、要求は殆どない。精神的に高揚すると発声あり。

【言語発達の経過】

- ①手話獲得期(CA3 : 8～) ; 模倣を経て手話の「終わり」の自発的な使用が開始される。音声言語の理解は困難。
- ②指文字・文字獲得期(CA4 : 7～) ; 手話で色名や「トイレ」など数語獲得。指文字50音表を見て指文字とかな1文字の対応を自ら習得。手話で習得した語を用いて指文字、文字による理解、表出の訓練を行い、それらを介して語彙が増加。書字可能。
- ③音声言語獲得期(CA5 : 7～) ; 習得した語彙の聴覚的理解が可能となり、表出課題では、指文字から音声表出に自発的に変化。日常場面では、手話と指文字で単語～2語連鎖の意思表示が増加。

【考察】視覚処理過程にて獲得した言語情報、特に日本語のモーラに対応する指文字、文字の習得が、聴覚的認知に積極的に関与し音声言語の獲得に至ったと考えられた。

第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 準備委員

大会長 大井 学 (金沢大学子どものこころの発達研究センター
大阪大学大学院 連合小児発達学研究所金沢校)

事務局長 田中 早苗 (NPO 法人アスベの会石川)

準備委員 小林 宏明 (金沢大学人間社会研究域学校教育系)

武居 渡 (金沢大学人間社会研究域学校教育系)

三浦 優生 (金沢大学子どものこころの発達研究センター)

吉村 優子 (金沢大学子どものこころの発達研究センター)

大兼政由梨 (小松市民病院リハビリテーション科)

谷内 初美 (国立病院機構医王病院リハビリテーション科)

第40回 日本コミュニケーション障害学会学術講演会 予稿集

2014年4月11日発行

発行者：第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会会長
大井 学

事務局：〒920-1192 石川県金沢市角間町
金沢大学 角間キャンパス 人間社会研究域 学校教育系
FAX：076-264-5515
E-mail：taikai40@ed.kanazawa-u.ac.jp

出版： 学術集会専門出版社
株式会社 セカンド

〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025

第40回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
事務局

〒920-1192 石川県金沢市角間町
金沢大学 角間キャンパス
人間社会研究域 学校教育系
FAX: 076-264-5515
E-mail: taikai40@ed.kanazawa-u.ac.jp